

村のある堀

也 卓 野 浜



堀のある村

農人



洪野卓也 作
箕田源二郎 絵

少年少女歴史小説シリーズ

堀のある村

浜野卓也 著

N. D. C. 913 東京 岩崎書店 1973 237p. 21cm

少年少女歴史小説シリーズ

■ 堀のある村

一九七二年七月三〇日 第一刷発行 ©
一九七三年五月一日 第五刷発行

著 者 浜野卓也

挿絵・装幀 箕田源二郎

発 行 者 岩崎徹太

発 行 所 岩崎書店

東京都文京区水道一丁目九番二号

〒 一一二 電(812)九一三一〜四

振替 東京 九六八二一

印 刷 所 第一印刷・三美印刷・松本印刷
製 本 所 福島製本

(著者の了解により検印省略)

(分) 8393 (製) 230672 (出) 0360

はじめに

これまでわたしは、岩崎書店の『東国の兄弟』ほか、いくつかの少年少女歴史小説をかいてきました。この作品ほど、苦勞してかいたものはありませんでした。

この作品にとりあげた奈良県郡山市、稗田の環濠集落といえ、歴史地理学上、有名なところで、応仁の乱前後、ひとつには村が戦争にまきこまれないため、もうひとつには、田畑のかんがい用水の不足をおぎなうため、村民たちが力をあわせて、村のまわりに堀を掘ったあとだ、というのが、歴史学者たちのほぼ一致した意見です。しかしそれ以上のこと、つまり、その堀が、いつ、どんなふうにして掘られたのか、というようなことになる、記録ものこっていません。

わたしはじめて稗田をおとずれてから、もう五年たっています。稗田の売太神社の神主であり高校の先生をしておられる中川正之祐氏には二度お会いし、そのあとも、なんとなく手紙、電話のやりとりをしました。大和地方の用水利用の問題については、桜井市長の池田栄三郎氏のほか、土地の古老のお話をきいてまわりました。また、堀を掘る技術については、土木学会誌をひもといたり、東京大学土木工学科の大学院生島崎武雄氏、熊谷組に長く勤められて現場にあかるく、かつ

児童文学者でもある角山勝義氏などに、いろいろおしえてもらいました。

そうした取材や勉強をしていくうちに、この堀をめぐらすということが、そのころの村びとにとって、どんなにつよい願いであったか、またその完成には、どんなにくるしいたたかいがあったかなど、わたしの頭のなかに、物語のイメージがひろがっていききました。

応仁の乱のはじまるころ、たいへん特徴的なことが三つあります。

ひとつは、將軍家をはじめ諸大名たちの家の相続（あつぎ）をめぐる争いが多くなっていることです。とりわけ管領（かんれい）の家からである畠山一族の争いがはげしく、和泉・河内（かわち）の農民二万人が焼けだされて、こじきとなり、畿内（きない）（近畿地方）をさまよったほどでした。

ふたつには、天候異変の連続です。太陽が二つ照って雨がまったく降らなかったとか、いなどの大襲来があったとか、古い記録にしろされています。そのため、たいへんな餓死者ができました。雲泉大極（うんたいごく）という僧の日記『碧山日録』によると、京の僧が、卒塔婆（そとば）八万四千本をつくって死者のなきがらの上においてあるいたが、いまは二千本しかのこっていないそうだ、とあります。

みつつめには、馬借（ばやく）や、地侍（じざむらい）をふくむ農民たちの土一揆（どいつぎ）が、まいとしのように京のまちにおしよせていることです。嘉吉元年（一四四一年）の一揆のごときは、「一揆の陣十六ヶ所」（『東寺執行日記』）といわれ、京の出入口をふさいで幕府軍とたたかうという、スケールの大きいものでした。

しかし、このような時代にありながら、政治の最高責任者であった將軍足利義政は、まったく無力で、「天下、ほろばば、ほろべ」とうそぶいて、能を鑑賞したり、銀閣寺を造営したりして、民衆の生活をかえりみませんでした。ひにくなことに、これが、美術史上名高い「東山時代」とよばれる文化をのこしました。ひがしやまじだい

この物語の背景となる時代は、日本歴史上、民衆がもっともひさんだった時代、だが、民衆がはじめてじぶんたちの力に目ざめて、無法な権力に立ちむかい、新しいものをうみだしていった時代でもあったのです。

なお、この作品では、一部の地名や人名にフィクションをつかいました。

さいごに、この作品の完成を助けてくださった前記の方がたのほか、児童文学者の来栖良夫氏、画家の箕田源二郎氏からは、貴重なおおくの助言をいただきました。また、この数年間、作品を生みだすために、たえず協力していただいた編集部の豊田匡介氏に、あつくお礼をもうしあげます。

一九七二年 夏

浜野 卓也

もくじ

おそわれた村 8

水あらそい 31

村の殺人事件 45

興福寺さまの鐘 58

雨ごい 70

願阿弥さまの施がゆ 87

応仁の乱 104



裏切もの 116

与平がいく 133

丹波の水師どの 154

一味神水 170

さむらいは出ていけ 186

水門がひらく 206

さむらいのいない村 220



挿絵・装幀 箕田源二郎
題字 今川 鷗洞

▼おもな人たち

中川左門 大和の国、稗田村の侍名字で、沙汰人がしら（代表者）。稗田神社の神主でもあるが、村の平和と農民たちのため、戦乱と日でのなかで苦勞する。隣家の徳永宗近に手引きされた畠山の軍勢のため、非業の死をとげる。

中川松若 左門の子。父を討たれ、こじきとなって京をさまよう。やがてさむらいとなり、応仁の大乱の戦いで手がらをたてるが、罪もない百姓を殺すさむらいの生活にうたがいを持ち、さむらいのいない村づくりのため稗田へもどる。

音作 水のみ百姓の子。中川家の作人となるが、左門の死後、こじきとなる。日でりになやむ水のみ百姓の子として、あけてもくれても、かんがい用水のことは

かり考えている。

与平 中川家の作人で剛力無双。左門の死後、京の周辺で馬借のむれに身を投じ、中川家再興をはかる。

徳永宗近 稗田村の沙汰人のひとり。管領畠山家に被官して稗田村の支配をねらう。おなじ侍名字の大内孫八とはかり、畠山の軍勢を村にひきいれ、中川左門を殺させる。

仁和茂兵衛 稗田北村の侍名字で沙汰人のひとり。親しかった中川左門の死後、徳永らの横暴に心をいためていたが、ひそかに村へもどった松若らと心をあわせ堀づくりにすべてをささげる。

梅吉 音作とおなじ水のみ百姓。村のための堀づくりで、松若などの侍名字の心が信じられず、村をうらぎり、徳永方につくが……。

奈良県郡山市の稗田は、「環濠集落」のあととして知られている。

昭和四十五年八月、わたしは関西線郡山駅で下車した。

めざす稗田は、二度目の訪問で、たずねあてるわずらわしきはぶけたが、この日は、奈良盆地が、そっくり釜うでになったようにあついで、タクシーさえも走っていない。

大和平をくねくねとつづく白っぽい道を、二十分ほどあるくと、戸数はすくないが、りっぱな門がまえの立ちならぶ、しずかな村にたどりついた。

村の東はずれに森がある。そこが売太神社である。いまから千年まえの記録、『延喜式』にも見えるふるい神社である。その神主であり、奈良正強高校の先生でもある中川正之祐氏は、わたしを、堀にのぞんだ一室にあんないしてくれた。堀の水面をゆらし、境内の青葉をそよがせて吹きこむ風と、つめたくひえた緑茶に、やっと人ごこちのついたわたしは、中川氏のひろげる一枚のおおきな和紙をのぞきこんだ。

堀にかこまれた村の、古地図である。

おそわれた村

ふた月いじょうも雨がふらなかつたので、大和平は、土ぼこりでけぶって見える。東の笠置も、西の生駒も、きいろくよんだ空のうえに、ぼかしたようにうかんでいた。

奈良街道を南へくだる、親子づれのさむらいがあつた。片目の大男の従者をつれてゐる。

「父上、やつぱり、わるいことのおこる前じらせじやろうか。猿沢の池がまっかににごるなんて。」
こどもが、親にたずねた。

奈良興福寺の境内にある猿沢の池が、ここ数日のあいだに、血をながしたように、すっかり赤くなつてしまつた。おどろいた興福寺さまは、大和(奈良県)じゅうの僧や、おもだつた武士をあつめ、「水鎮め」の祈禱をはじめた。

このさむらい、中川左門も、奈良にちかい稗田村の沙汰人(村の代表)としてまねかれ、いまそのかえりである。

「わるいことは、とつくにはじまつてゐるぞ。」

左門は、こい眉をひそめていった。

「河内(大阪府)畠山家の、あとつぎあらそいのいくさは、火のようにひろがるばかりじゃ。このうえ、管領の細川、山名さまが、それぞれのあとおしの軍をだしたりすれば、いくさは畿内(近畿地方)じゅうにひろがるだらう。」



道をまがると、ひどい土ぼこりだった。おもわず三人が顔をしかめると、土ぼこりのなかから、数人のこじきたちであらわれた。老人、男、女、みんな、骨と皮ばかりにやせていて、こどもだけが、きみわるく腹をふくらましていた。

「家をいくさでやかれた、河内かわちの百姓でございましょうな。」

すれちがったあと、片目の大男が左門さもんにいった。左門はいたましげにうなずいて、わが子の松まつ若わかにともなく、片目の従者にともなくつぶやいた。

「畠山かたまたまの一族どうしの合戦で、田畑をあらされ、家をやかれた河内の百姓は、五千人ときいたぞ。こじきとなり、どこへいくというあてもないままに、さすらっているのじゃ。あわれよのう。」



「猿沢の池があかくにごったのを、『わるいことのおこる前じらせ』と、いまさらあわてるほうが、おかしいというものでございますな。」

与平は、片目をひからせていった。

きょねん、長祿三年（一四五九年）は、夏から秋にかけて、一滴の雨もふらなかつた。ひでりつづきで、きいろくけぶつた空に、太陽が二つ照ったという。

秋になると、いなごの大群が、空もくらくなるほどおそつてきて、稲をくいあらした。

そしてことし（長祿四年）も水不足だった。二年つづきの飢饉になりそうであった。

もう二カ月も雨がふらない。いつになったら田植ができるやらと、大和の百姓たちは、まい日、照りつける太陽を、うらめしそうにおおぐばかり

であった。

「あっ、だんなさま、あの火の手は！」

とつぜん、与平が前方の森をゆびさしてさげんだ。

くろくくすぶった煙が見える、と思ったとき、ぱっと火の手があがったのである。

「父上、稗田のあたりじゃ。」

松若^{まつわか}が、うわずった声でさげんだ。

「村が焼ける……、いそげ松若！」

中川左門^{なかつかわさもん}は、刀の柄をにぎりしめてはしりだした。

村の北を流れる地藏院^{じざういんがわ}川をとびこえ、そのまま、やぶの中をつきつて、三人は村にはしりこんだ。

火の手は、村の数カ所からあがっていたが、左門たちがかけつけたときには、火勢^{かせい}はよわまっていた。風のないのがさいわいで、火をはなれた家だけが焼けたらしい。

だが、村が焼けているというのに、あたりはぶきみにしずまりかえっている。

「やっ、あんなところに……。」

与平が、片目をひからせた。道ばたの百姓小屋の軒^{のき}ばたに、うつぶせにたおれている老婆^{ろうば}があった。

「お婆ば、しっかりいたせ！」

血にそまった老婆^{ろうば}は、ひと袋の米をだいたまま死んでいた。

「中川のおやかたさまあ……。」

反対がわの草むらで声がした。

「おお、小六^{こく}、小六ではないか。」

村のわかい百姓小六が、十日まえにいっしょになったばかりの新妻^{にいづま}の死体にしがみついて、泣きじゃくっていた。

「な、なにやつじゃ、村をあらしたのは。」

「わかりませぬ。ひるすぎ、高野街道^{こうやかいどうぐち}口から、五、六騎の騎馬武者^{きばむしや}と三十名ばかりの軍兵^{ぐんげよう}が

……。」

と、泣き声をあげた。

「いそげ松若！」

中川左門は、村のなかを南にはしった。ほそい道は、せまい村のなかを、まるで迷路のように、

いくつもおれまがつている。

村の南がさわがしかった。中川左門の屋敷の地つづきである、稗田神社のあたりだった。

三人がかけつけると、竹槍、脇差、鎌などを手にした村びとたちが、血ばした目で、ころがっているふたつの死体をにらんでいた。どこの軍兵かわからないが、村を焼き、百姓を殺し、米や麦をうばった敵の中にあつて、にげおくれたものであろう。

やせて貧弱な村びとのうち、数人、からだの大きな男たちがいた。みな陣羽織を着て、槍をさげている。

「るすちゆう、村を焼かれて、もうしわけない。」

左門にむかつて、ひとりの黒い陣羽織がいった。

「おお、仁和どのか。たいへんなことでござったのう。して、村のぎせい者は？」

すると、その仁和茂兵衛のよこにいた、背のたかい、赤い陣羽織が、かわって返事をひきとつた。

「いまのところ五人……年より、女、子どもばかり、ま、たいしたぎせいではないわ。たかが、畠山合戦の落武者ばかりじゃ。稗田の村には、かくいう徳永宗近がおる。なにほどのことができようぞ。」